

第一章

むかしむかし、あるところに幼い王子さまがいました。その王子さまは体が弱く、外で力いっぱい走り回ることができません。外の世界へ探検しに行くことも叶いません。それでも王子さまは悲しくありませんでした。窓をのぞくと爽やかな青空がこころを満たしてくれて、眩しい太陽は体をそっと包み込んでくれます。鳥のさえずりに耳をすましていると、ささやくように風がそっと頬を撫でてくれます。彼にとってこの世界は友達だったのです。そのせいでしょうか、王子さまは月である私と言葉を交わすことができたのは。私と言葉を交わすことの出来た人間は少年のアンデルセンとこの王子さまだけでした。私たちは毎夜毎夜時間を惜しまず語り明かしました。それは、かつてシエヘラザードが千一夜物語を語りつくしたように。

王子さまはいつもその日に読んだ物語について私に教えてくれました。それはそれは楽しそうにドラゴンに乗って空を飛んだのだ、お姫様になってロマンチックな出会いをしたのだ、まるで本の世界に入り込んだかのように話していました。王子さまが本が好きなることを知っていた、王さまとお妃さまは王子さまにたくさんの本を買ってあげました。本を読んでいると王子さまは街の娘にも、ライオンにも、ドラゴンにもなって世界中を旅することができました。

私は王子さまと大切なかけがえのない宝物のような時間を過ごすことができました。

第二章

「ある夜、王子さまは私に理想の世界について話してくれました。

そこでは時間と文化が入り混じり、みんながみんなお互いのことを大切にして笑い合える、そんな世界です。人間も幽霊も、憧れも悲しみも、幸せも不幸も、今も昔も、ケンカすることなくお互いを認め合い称え合う。

『みんなちがって、みんないい』

そんな世界を王子さまは涙を浮かべながら何度も何度も私にうったえかけました。

その夜は王子さまの国と隣の国の間で戦争が始まった日でした。

王子さまの大好きだった静かな昼下がりには兵隊さんの足音でぐしゃぐしゃにされてしまい、近くの街からは人々の泣き叫ぶ声が聞こえてきました。

王子さまはその晩から眠ることができなくなってしまうました。私は王子さまのそばにいたことしかできませんでした。王子さまをなぐさめることも、心を落ち着かせてあげることもできませんでした。なぜなら人間が猿の時代だった頃から見守っている私でさえ、正しい答えが分からなかったからです。もういっそ、正しいなんてないのかもしれない。

そんな日々を過ごしていると体の弱い王子さまはみるみる痩せ細っていきました。私はそんな王子さまを見ることが耐えられませんでした。

私が最後に王子さまと話した夜、それは戦争が始まってから初めてのクリスマスでした。その夜だけは爆弾が降り注ぐ音も、誰かがあえぎ苦しむ声も聞こえず、静かな、とても静かな夜でした。

友は掠れた声で私に最後のお話をしてくれました。

それはいつか話してくれた彼の理想の世界のお話です。

私は涙を我慢することができなくなりました。王子さまは私の大好きな、なつかしい、いつか風の優しさを教えてくれた時と同じ、無邪気な笑顔で語りかけてくれました。それは彼に最後の時が確かに近づいていることを私に知らせました。

夜十二時の鐘の音が空高く響き渡りました。

王子さまの胸には一枚の羊皮紙とその紙に描かれた世界が横たわっていました。

その紙の一番上には「Fantasia」の拙い文字が横たわっていました。

第三章

その夜、世界は嵐に包まれました。空をいっぱい黒い雲が覆い、バケツをひっくり返したような雨が絶え間なく降り注ぎました。私は悲しくて悲しくて声を出して泣きました。

私はどうしても王子さまの描いた理想の世界を現実のものにしたいくなりました。それが友を救えなかった私のせめてもの償いになると祈っていました。

そこで私は時間をつかさどる太陽に相談することにしました。

太陽は言いました。

「あなたの言っている世界というのは、一つの空間に様々な時間を混ぜ込んだ、るつぼのようなものなのでしょう。確かにこの世界は残酷で、そのような世界が実現したならばそれはそれは素晴らしいものになるでしょう。しかし、私たちの力ではその理想の世界を現実のものにすることはできません」

私は藁にもすがる思いで太陽に語りかけました。王子さまと過ごした楽しい日々、悲しい別れ、たった一つの希望を私は声が枯れるまで太陽に語り続けました。すると、もうそこには愛しか残っていませんでした。

太陽はいつの間にか涙を流しており、私の喉からも嗚咽しか出てこなくなっていました。

長い沈黙の後、太陽は私に言いました。

「光の帝国に行きなさい。そこにはあなたの答えが残っているかもしれない」

第四章

私は太陽に言われた通り「光の帝国」を目指して旅に出ました。

しかしどうすればその場所に辿り着けるのか私にはわかりませんでした。太陽には「そこでは昼と夜とが共存する魅惑の国」だと言われただけでした。

私はたくさん考えました。ちょうど太陽と話してから二百五十日目だったでしょうか。

私は一つ決定的な間違えをしていることに気づきました。それまで私は「光の帝国」がどこか遠い場所にあるものだと思い、やみくもに探していたのです。しかし、それこそが間違えだったのです。

「光の帝国」とは私自身のことだったのです。私は真つ暗な夜の中にたたずむたった一つの真ん丸な昼だったのです。

私は自分の中にある「光の帝国」と対話するため、自分の無意識に声をかけ続けました。

私は想像しました、夕闇に包まれた街に真つ青な青空が望むのを。

そこはどこか違和感のある、それでも落ち着いた世界でした。

「ようやく辿り着くことができたのか、待ちくたびれたぞ」

私の脳内に大きな声が響きわたりました。

「汝の事情は知っておる。なんたって私は汝自身なのだからな」

大きな声は不気味な声で笑いました。私はその声に耳を傾けました。

その時「光の帝国」に風が吹きました。水たまりに反射した光は揺れ、空の雲も動きました。

私は大きな声が次に話す言葉がわかりました。

「汝の夢は叶う」

第五章

大きな声は続けました。

「今から話すことをよく聞きなさい。私たちにとって本当の現実とは何か考えたことがあるか。私は自由な想像力だと考える。理性や常識なんていうものは大衆の主観に過ぎず、客観性のかけらもない。そんなものを現実としたら汝と私のような、昼と夜とが共存する世界など生まれるはずがないのだよ。本当の現実というものは無意識であり、自由な想像力そのものだと考える。人間だってそうだろう。彼らだって自分の目で見て、脳に投影され、想像した世界を現実とみなしている。だからこそ、ちょっとした工夫をすれば汝の描くワンダーランドも世界に生み出すことができる」

私は大きな声の言葉をよく理解することができました。大きな声は続けます。

「地上にワンダーランドを作ることは一筋縄ではいかないものなのだ。完全なる想像の精神世界であるのなら簡単なのだが、そこには物体という概念が存在しているからだ。しかし、安心したまえ。汝は一人ではない。時間というものは物体による万有引力によって決定される。もし、時間という概念を消してしまったらどうであろう。当たり前のように世界のバランスが崩れる。そこには物体というものは存在せず、ただ虚無が広がり、想像力の樂園が生まれるであろう。その空間にならば汝とその王子の樂園を描き出すことができるであろう。あとは時間をつかさどる太陽に相談してみると良い」

私は希望の道が見えたように思いました。

最後に大きな声はこう言いました。

「想像した世界を現実にするのではない。想像した世界こそが現実なのだ」

第六章

私は太陽に「光の帝国」から聞いた言葉を伝えました。

太陽はしばらく思い悩んだ後、こう言いました。

「私が時間を止められるのには限界がある。限定された空間を四十八時間だけなら可能であろう」

私は嬉しくて飛び跳ねそうになりました。しかし、太陽は思い詰めた顔で続けました。

「しかし、時間を止めるというのにはとても大きな力が必要になる。いつも私は地球以外にもあなたや他の星に昼を届けているが、今回ばかりは力を分散させることができない。わかりやすく言うのであれば」

太陽は言葉を途切れさせました。私が促すと太陽は覚悟を決めた顔で

「私が時間を止めている間、あなたには地球の裏側にいてもらいたい。そうしないと私の力を一点集中することができないのだ」

私は自分の立っている地面が崩れ落ちたかのように思いました。それは王子さまが思い描いた世界を私は決してみることができないことを表していたからです。

私はいつか王子さまが話してくれた詩の一説を思い出しました。

『狭き門より入れ、命に至る門は狭く、その道は細く、これを見出すもの少なし』

私は今になってこの言葉の意味がよくわかりました。

しかし、それでも私はどこか嬉しい気持ちが残っていました。王子さまの描いた理想の世界が現実になると言う事実だけで私にとっては十分すぎる奇跡だったのです。

私は我が友、太陽に誠心誠意を込めてたった一つのとても大きなお願いをしました。

第七章

私は招待状作りに奔走しました。せっかく楽しい世界を作るのであればたくさんの人に来てもらいたいじゃないですか。右上には月をを左下には太陽の刺繍をつけ、トリコロールとペンマークを丁寧に描きました。

世界に「Fantasia」が生まれる日は十月の満月の日に決めました。

世界の入り口には王子さまの大好きだった建物を建て、世界を九つのエリアに分けてみんなの仲良くできるそんな理想を叶えたい。

明日の誰そ彼時、朝焼けに染まる世界から時間を盗み、二人のささやかな抵抗をこの世界に開花させる。

王子さま、見ていますか。

この夜が明けたとき幻想曲が流れ出しますよ。

一曲目はなんでしょうかね。

あなたの大好きなワルツが最初だといいですね。